調査研究専門グループ活動報告

江戸東京博物館では、館員おのおのの専門分野における調査・研究の一層の充実をはかるため、平成7年度より「調査研究専門グループ」を設け、活動を開始した。グループは、第1（歴史）・第2（文化）・第3〔生活）・第4（博物館学）にわかれ、職員の任意参加によって構成されている。活動内容は、グループに属するメンバーの自主性にまかせられているが、都市歴史研究室では、研究員らによる助言など、様々な形でその活動を支援している。

設置以来、3年目を迎え、ミュージアムセミナーや論考・資料紹介など、具体的な成果の結実が見られるグループも出てきた。ここでは、今年度を中心に、各グループの活動状況を報告してもらう。なお、各グループの所属者名を五十音順で示し、各報告の文責者は、右肩に＊をつけた。

第1グループ　（歴史ー近現代史）

板谷敏弘*・岩城紀子・新田太郎・益田茂・山崎尚之・米崎清実

近現代史グループは、戦後史とくに占領期を対象として調査研究を行っている現代史班と、幕末維新期以降の近代庶民生活を対象とする近代史班に別れて活動している。

現代史班では、一言に占領期といってもさまざまな問題があるので、先ずは概説書をたよりに課題をいくつか決め、グループの各人がその課題についてレポートするという勉強会のようなかたちで行っている。課題は、たとえば引揚げのこと、戦災孤児のこと、労働運動のこと、食糧問題のことなどである。また、より具体的な事例調査ということで、当館に寄贈された資料の中から、ある家庭の戦中・戦後の家計簿を整理しつつ、とくに食糧事情を探っている。ヤミ市で購入したモノとその価格等が詳細に記録されており、終戦直後の都民の生活ぶりをうかがうことのできる資料として注目している。こうした活動を継続させながら、いずれはその成果を展覧会に結実させたいと考えている。

近代史班では、平成10年2月に実施した「絵すごろく－遊びの中のあこがれ－」展の開催準備を通して得られたさまざまなデータを集約し、その分析を通して東京の近代庶民生活の一端を探ることを当面の活動の目的としている。

また、当館では現在、館蔵資料の再分類作業を行っているが、今年度近現代史グループでは、近代技術によって作製された印刷物の分類見直しを行った。しかし、なにしろ印刷物といえば種類も量も膨大なので、苦闘している。

夏のミュージアムセミナーではグループとして企画・実施に参加し、「東京のりもの体験教室」と称して、常設展示室内での人力車やリンタクへの乗車、普段は触れることの出来ない展示中の円タク（A型フォード）の車内に乗り込む、といった、来館者が直接楽しむことのできる体験型の催しを実施した。

第1グループ　（歴史ー近世史）

阿部貴子・粟屋朋子・市川寛明*・江口智子・落合則子・河村三枝子・田中実穂・近松鴻二・畑尚子・原史彦・真下祥幸

今年度は、館蔵資料のなかから、江戸に関する古文書群を選び、これを輪読、復刻して、最終的には資料紹介を『研究報告』に掲載することを目標に掲げ活動を続けてきた。そこで着手したのが「江戸湯屋文書」である。ここには古文書ばかりではなく、湯屋の絵図面が残されていたので、専門研究員・米山勇氏との共同作業のもとに、江戸時代の湯屋建築の再現を試みた。これらの成果が、今号の『研究報告』に掲載されている「江戸湯屋建築の復元的研究」「江戸湯屋文書」の2稿である。次に「大和郡山藩士阿部家文書」をとりあげ、藩主の登城にまつわる作法の書き付けなど、江戸に関連の深い古文書の復刻を続けている。現在のところ、以下の史料が筆耕を終えており、これらの成果もいずれ何らかの形で公開することを目途としている。

(1) 卯暮渡御物成
(2) 阿部軍内登城命令書
(3) 両山月桂寺御祥月登城
(4) 下馬其外心得方
(5) 御供下座覚
(6) 相之間詰心得
(7) 御供諸事心得方控
(8) 御供方定
(9) 東都御供心得留

また、館の普及事業であるミュージアムセミナーにグループとしても協力し、古文書の解読講座を継続的に実施している。

第2グループ　（文化ー芸能）

粟屋朋子・飯塚晴美・横山泰子*

舞踊、音楽、演劇などの芸能は、演じられているその場その時が全てである。同じ演目でも毎日みていると、演者の状態や様々な環境上の差異のため、全く異なる仕上がりになるのは言うまでもない。上演されている時が、その芸能が生きている時であって、パフォーマンスなき所でその芸の魅力を語ることはそもそも大変難しいことだ。博物館で芸能について調査研究をする時、いつもこの問題につきあたる。芸は現実にみなければわからないものだとすると、芸能には劇場やホールがあればそれで十分ということになるからだ。

しかし、現実に上演されている芸能は刻々と変化していき、新しく生まれるものがある一方、ついえてしまうものもある。芸能にたずさわる方法で、劇場やホールより博物館が優れているのは、一つは保存・記録機能だろう。過去の芸能、例えば江戸歌舞伎を実際にみることはできないが、舞台衣裳や役者絵、歴史を記した解説パネルや立体模型で何とかそのありし姿をしのぶことができないものだろうか。さらに現存していても滅多にみることのできない芸能を記録しておくことはできないものだろうか。そんな問題意識から、劇場やホールで楽しむことのできない芸能について、ビデ

オや台本、絵などを手がかりにもっと深く知りたい、知ってほしいと思ってミュージアムセミナーなどの催しの企画・実施に関わっている。今年度の講座は、岡本綺堂の世界や、御蔵島の歌と踊りなどの企画を実施した。

第2グループ　（文化ー建築）

阿部由紀洋・佐々木秀彦・高橋英久*・早川典子・米山勇

建築グループでは、建築史研究を主とし、それとともに博物館における建築関連の情報、資料の収集・公開の方法について追求している。

昨今、各美術館・博物館などで建築をテーマにした展覧会が行われるようになってきた。しかし、現在のところ、残念ながら博物館独自の建築史研究に基づいた成果の発表およびその方法に関しては発展途上の感が否めない。

建築グループでは、博物館ならではの着眼点と方法により、建築を楽しく、わかりやすく、そして興味深いものであるということを身近に感じられるような研究成果の還元を目指している。

現段階での活動内容は、(1)定例研究会による学芸員および研究員の学術性の向上を目的として、①東京における「都市ー建築」像の総合的把握　②館蔵資料の読解と通常業務への成果還元　③『研究報告』への寄稿　(2)普及活動による都民との交流を目的として、①ミュージアムセミナー　②江戸東京たてもの園セミナー　③その他の普及事業　(3)博物館における建築史研究および成果公開の方法研究である。

現在専ら力を入れているのが、都市を具体的に形成してきた「建築」を分析することによって、20世紀という時代の東京を読解してみようという試みである。

文明開化の時代の残像を残しながらはじまる20世紀の東京は、大災害、戦争、オリンピック、高度経済成長という怒涛の事象の中で、多数の人間を包容しながら都市として発展していき、また一方で機械の時代、情報の時代をともに歩みながら現在に至っている。

建築という媒体によって切り取られる時代はどのようなものであり、また人々にどのようにうったえかけ、どのように見られてきたのかは非常に興味深いテーマである。

またそれと関連して建築グループでは、建築と人とをより豊かに結びつける接点とはいかなるものなのかということも重要なテーマとしている。江戸東京博物館や江戸東京たてもの園で催される各種普及事業において、解説ガイドやワークショップ（ベニヤ板のドームづくりなど）など、その方途を試みている。建物を見るときのポイントを解説したり、見るだけではなく簡単な構造物を製作してみたり、収蔵建造物内で当時の生活を実体験してみたり、建築に触れる場、機会を積極的に提供しようと考えている。

江戸東京博物館の分館である江戸東京たてもの園は、都内にある、近世～近代の建築を収集・公開している希少な野外博物館である。

今も残る建築という近代遺産は、大型であるが故に後世への保存・継承には大きな困難を抱えており、多くの人に愛されながら数々の建築が惜しまれつつ姿を消してしまった。我々が生きるこの時代の足跡は形としてより多く後世へと継いでいきたいものである。建物を保存するための法的整備は未だ完璧とは言えないが、その機運は高まりつつある。

江戸東京博物館・江戸東京たてもの園を基盤とし、そして東京をフィールドとしながら、文化としての建築を継承していくために研究活動を行っているのが建築グルー

プである。

第2グループ　（文化ー美術）

江口智子・江里口友子*・岡本純子・畑麗・畑尚子

今年度の活動計画は、⑴館蔵品展覧会を立案するための基礎作業として、絵画資料を中心にキーワードごとの館蔵資料のリスト作成⑵歌川広重「東海道五十三次（保永堂版）」の初摺・異版一覧表作成⑶館蔵資料再分類作業の美術分野資料における協力を掲げた。具体的な成果をあげるには到っていないが、いずれ企画展や、『研究報告』等を通じ、成果を公表すべく、現在も引き続き活動を行っている。

第2グループ　（文化ー文学）

田中実穂・山崎尚之・湯川説子*・行吉正一

今年度は「東京の文学・詩」「資料としての図書」の中から、メンバー個々の関心に基づき個人研究テーマを持ち、随時研究発表を行った。こうした活動によって得られた成果を、来館者に普及するため、館蔵の図書資料による図書室展示を、本館7階の図書室にて、以下のとおり実施した。展示の際は解説シートを作成し、館内に配付した。

⑴「本の東京」展　　平成10年9月15日（火）～9月27日（日）
担当者：行吉正一・田中実穂

⑵「日記の虚と実」展　　平成11年1月12日（火）～1月24日（日）
担当者：湯川説子・山崎尚之

また、研究活動の参考とするため、他館の展示見学も機会を見つけては積極的に行っている。

第3グループ　（生活ー文化人類学）

江里口友子・小林克・鈴木章生*・友野千鶴子・西村直子・新田太郎・松井かおる・松崎亜砂子・我妻直美

調査研究専門グループの文化人類学グループでは、北原研究室長・小島美子元研究員の指導を仰ぎながらフィールドワークを積極的に取り入れ、歴史学、考古学、民俗学、美術史学など学芸員個々の専門性とテーマを活かした調査研究を平成8年度よりスタートさせた。当初中長期プランとして掲げたのは、隅田川・東京湾・武蔵野・山の手・下町など、東京をいくつかのブロックによって区分し、地域から東京の歴史や生活や文化の特性を明らかにしようとするものであった。この計画にしたがって隅田川を対象に積極的に調査研究を進めてきた。

隅田川は、都市内河川として交通・運輸、文化など極めて重要な役割を家康の入府以来果たしてきたが、戦後の経済成長のもとであまり省みられなくなっていた。しかしながらここ10年余り、バブル経済期を含む都市再開発により隅田川を取り巻く状況は大きく変化し、開発と治水の歴史から、利水さらには親水へと大きく転換することとなった。そこで変貌めまぐるしい隅田川の現在を調査する私たちグループの大きな

ねらいとして、「地域からの視点」「現代から過去への視点」「伝統的なるものの再考」「都民意識の変化」等いくつかの課題を持ちつつ、現代の東京にとっての隅田川のありようを明らかにすることと定めた。

平成9年度は基礎調査として文献調査・館蔵資料の抽出調査を進めるとともに、隅田川の上流下流を船で往来し、さらに深川・佃・両国柳橋・吾妻橋・向島・橋場・白髭等の流域をサンプル調査し、平成10年度の本調査へと引き継ぐこととした。

平成10年度の本調査は、次の事柄に調査対象を大きく絞り込み、文献資料の収集を基本にしながら、隅田川の現在と人びととの結びつきに照射をあてた聞き取りや実態を記録する調査をすすめた。

(1) 館蔵資料　資料情報カードの集約
(2) 隅田川の歴史と景観　水害と堤防整備、高速道路建設による景観の変化
(3) 隅田川の交通　航行船舶（水上バス・ゴミ・し尿運搬船等）の定点観測
(4) 隅田川の遊興　柳橋の料亭・髪結い・芸者、屋形船、船宿
(5) 隅田川の競技　レガッタ競技
(6) 隅田川の祝祭　向島・隅田川公園さくらまつり、隅田川花火大会、牛嶋・佃祭礼等
(7) 地域住民と行政の在り方

平成11年度は本調査でできなかった事柄の聞き取りをすすめるとともに行政関係資料の収集につとめて、調査内容を協議・検討しつつ調査報告としてまとめる予定となっている。

第3グループ　（生活―考古学）

小林克・友野千鶴子・松井かおる・松崎亜砂子*

今年度の考古学グループの活動にあたっては、フィールドワークの実施および近世都市の考古学に関する研究会の開始を主眼とした。

まずフィールドワークとして、青梅市に所在する万徳旅館跡の考古学的調査を行った。万徳旅館は、江戸東京たてもの園で収蔵されることが決定した建物で、平成9年度末に調査、解体された。本旅館は伝承によれば、幕末～明治初期に建てられたとされ、青梅街道の拡幅にともない昭和15年に曳き屋された。建物は創建年代で再現される予定であるが、曳き屋された時点で竈は動かされており、それ以前の位置が不明となっていた。そこで、古い段階の竈の位置を明らかにし、さらには当時使われていた食器類を明らかにするため、発掘調査を実施することとした。これはたてもの園の業務として担当学芸員の小林が中心となって行い、考古学グループがその支援をした。

発掘は、2メートル×4メートルの小さなトレンチを試掘したに過ぎないが、幕末～昭和時代にかけての遺物と、竈の位置を示す炉石と焼土2カ所が出土した。この発掘成果である遺物や遺構図面の整理・まとめも、たてもの園の移築事業に反映すべく進めている。

研究会は、平成8年度の企画展「掘り出された都市」展の成果を発展、深化させることを目的としている。江戸だけではなく、同時代の同じ都市という性質をもつ場所での考古学的調査の成果について勉強し、比較を行うことによって、都市構造や生活文化の本質を探ることが大きな課題である。今年度は、アムステルダム・ロンドン・ニューヨークの発掘成果、食習慣・喫茶・喫煙・都市整備の比較といったテーマを設定し、分担して調査・研究を行っている。

第4グループ（博物館学）

飯塚晴美・岡本純子・河村三枝子・小林淳一・佐々木秀彦*・鈴木章生・高橋英久・畑麗・湯川説子・米崎清実・米山勇

平成8年度より「博物館情報の体系化」をテーマにグループ研究を進めている。博物館の情報は収蔵資料に関するもの、展示に関するもの、調査研究に関するもの、管理運営に関するもの等多岐にわたる。

収蔵資料に関する情報は、当館でも体系化されており、一部を公開している。しかし自館の活動についての記録－たとえば展覧会のポスター、普及事業の案内、各種会議の議事録、調査報告類、当館に関する報道記事等－については管理と公開の体制が確立しているとはいいがたい。

当グループでは、この点について今後のあり方を探求することにした。自館の活動についての情報を整理し、共有化すること、つまり適切な記録管理の実施が博物館学を研究する上で不可欠となると考えたからである。

具体的にはウィリアム・A・デイス著『ミュージアム・アーカイブズ』（米国アーキビスト協会　1984年）の抄訳をすすめた。この文献は、アメリカの博物館における記録管理の経験にもとづき、非現用文書の収集・整理・公開について述べた入門書である。実践的なマニュアルとなっており、わが国における公文書の保存・管理・利用問題を考える上でも、ひいては当館のあり方を具体的に考える上で有用である。

今後はこの文献の内容に加え、日本国内の事例調査をおこない、当館における記録管理のあり方について現状分析と提言をとりまとめたい。

またグループ研究の他に、メンバー個々が探求しているテーマについても個別研究を進め、随時研究発表を行った。

さらに、他グループと同様、ミュージアムセミナーにグループとしても参画し、「舞台裏から見る博物館」というバックヤードツアーを2月3日(水)、2月6日(土)の2回おこなった。博物館の役割と学芸員の仕事をわかりやすく紹介することを目的として、資料の収集・保存・展示の実務を館内の施設を廻りながら説明した。